

ちっほけ村



「あの有名な、青山だぞ。ムクリ」

村長が、得意げに指差した。

村長は、コーヒーが好きだ。山まで運んできたのは、もちろんモンササである。

ムクリが、茶色い袋から豆を取り出す。大きめの石で砕く。

モンササは気を利かせたようだ。豆と一緒にとってきたフィルターは金属でできていて、何度も使える。ペーパーフィルターは必要ない。

「しかしな、上海からマカオまで、船で一時間か」

村長は、チョコのかかったコーヒービーンズにかじりついた。モンササも、つまむ。

ムクリは一人、じっと、お湯が沸くのを待っていた。

「モンササ。食後のキッキボールしよう」

村長は、転がっていた豆をモンササの方に投げた。

不意に、始った。

「キ」

「ピ」

モンササは、高い声で鳴いた。

「負けたあ」

モンササの勝ちである。さすが、鳥だ。

「村長を、村長たらしめているものは、何だかわかるか、ムクリ」

ムクリは、何も言わず、薪を足した。

「そう、それは、強い意志だ。村長とはどうあるべきなのかを自ら考え、あるべき姿を描く。そして、その背中を追う。追いつける。届かない、幻のようなものを、追いつけるのだ」

もう、いいだろう。そう思い、ムクリは立ち上がった。八十度ぐらいのお湯の方が、雑味が少ない。湯を別の入れ物に移した。

「ムクリを、ムクリたらしめているものはなんだ」

ムクリは、軽く円を描くように、砕いた豆に湯を落としていく。

「そう、村長だ。何て言ったって、名付けたのは、この村長だからな」

「ピ」

モンササが、不意にキッキボールを始めた。

「ピ」

虚を付いた。だが、村長は反応した。

「甘いな。だが、待て。モンササ。今、村長は良い話をしている。あ、待て。もう、怒った」

モンササは、生粋のキッキボーラーだった。

木製のカップとコーヒーの、茶色のグラデーション。なかなか、よく合う。一口、すすった。ムクリは、納得した。ただ、香りと、うまみだけがそこにあるという感じだ。足し算ではなく、むしろ引き算。全く雑味がない。

「キ」

「キ」

「ピ」

「負けたあ」

村長は、大の字になった。空を仰ぐ。

モンササは、一流のキッキボーラーだった。

「やっぱり、村長もブログとか、ツイッターとかやった方がいいと思うか、ムクリ」

どうやってだ、とムクリは思った。

「お前を、村民にしてやろうか。いや、もっと、やさしくの方が」

村長は一人で何か言っている。

「モンササ。CSS使えるか。村長、使えるのHTMLだけなんだよな」

それなら、何とかなるだろう、その前に、何かおかしいだろう、とムクリは思った。

「難しいなあ」

結局、ビラを配ることにしたようだ。

小さな紙の束を小脇に抱え、村長はモンササの背に乗った。

「ちょっと、いってくる」

村長は街へ向かった。

街の上空。

「つぶやいてやる。おい、人間よ。村長のつぶやきだぞ。村長、なう」

叫んだ。

ビラを撒く。ひらひらと、舞う。建物の陰から、二人で様子をうかがった。

くしゃみ。どうやら、鼻に入ったようだ。

辺りの人間が、不思議そうに鼻をおさえている。

「おお、みたか、モンササ。もう、噂になった。村長のつぶやきが、噂になった。これが、リツイートってやつか」

何かがおかしい、とモンササは思った。

ビラは、全て手書きだ。村長愛用の4Bの鉛筆の芯のかけらで書いた。紙は、目に優しく、書き味が滑らかな、よくわからない、紙だ。途中から、手が痛くなり、イリジウムのかげらで書いた。コンバーターなどは使えないので、モンササの羽の先端に、イリジウムを埋め込んだ。うまいこといくものだな、とその時、モンササは感心していた。

村長は、今、全身が真黒だった。付着したインクが固まってしまったのだった。古典的なブルーブラックを使ったせいだ。

帰り。村長は超音波洗浄機の中に忍び込み、ひどい目にあった。固形物の振動で、全身がびりびりとしびれるのだ。

山に戻ると、ムクリが晩飯の支度をしていた。うまそうな、レモンステーキである。

「政治家は、民の代表ではない。民主主義とかいう、政治形態であつてもだ。彼らは、自分に投票してくれた人間の代表者なのだ。いろんな民がいる。だから、いろんな政治家がいる。多分、そうだ。なんであんな奴が政治家になれるんだ、という疑問はこれで解決されるだろう。良い奴

がいれば、悪い奴もいる。つまり、良い奴の代表者と、悪い奴の代表者が生まれるんだ。良い奴ばかりだったら、そんなことにはならないんだが。まあ、戦いを誰に委ねるか、そういうことだな。何人かは、言うだろう。僕に投票してくれたら、君に良いことをしてあげよう。何人かは、言うだろう。奴らの好きにはさせない、と。その点、ちっぽけ村には、良い村長しかいない。ちっぽけ村は、平和だ。ちっぽけ村に、選挙はない。村長は、永久に不滅なのです。さあ、あなたも村民に」

何度も、何度も見た、夕焼け。

村長は、間違っていない。肉に、かじりついた。しぼりたてのレモンは、本当に香り高い。

誰かが糺さなくては、汚れていく。村も、国も、おんなじだ。

高いところから見る夕焼けは、空が藍色になっても、太陽のしっぽが見えるので、少し、さみしい。